

# からから 便り

## もくじ

- 「三陸ジオパーク」の魅力
- 寄稿 「1ページのたより」
- オンライン座談会のご報告

岡山&北海道 母子避難トーク「子育て終了と10年後のわたし」

- 北海道における被災避難者の受入状況
- 編集後記

## 「三陸ジオパーク」の魅力



東日本大震災津波伝承館（岩手県陸前高田市）

▼三陸ジオパークの魅力  
三陸ジオパークは、青森県八戸市から岩手県の沿岸を縦断して宮城県気仙沼市までをエリアとする、日本一広大なジオパークです。地球活動の歴史と震災を後世に伝える学習フィールドとして、2013年9月に「日本ジオパーク」として認定されました。

三陸地域は、太平洋プレートの沈み込み帯である日本海溝に面し、日本列島の起源ともいえる5億年に

ジオパーク (Geopark) とは、「地球・大地 (Geo) と「公園 (Park)」を組み合わせる言葉で、「大地の公園」を意味し、地球を学び丸ごと楽しむことができる場所です。大地 (ジオ) の上に広がる、動植物や生態系 (エコ) の中で、私たち人 (ヒト) は生活し、文化や産業などを築き、歴史を育んでいます。ジオパークでは、これらの「ジオ」「エコ」「ヒト」の3つの要素のつながりを楽しく知ることができます。

本列島の起源ともいえる5億年に

およぶ大地の歴史を連続的に記録している、貴重な地域です。また、2011年3月の東日本大震災津波をはじめ、歴史的に何度も巨大津波の襲来を受けた地域でもあります。いま、三陸ジオパークでは、地球活動の歴史と震災の記憶を後世に伝える学習フィールドとして、自然や文化、防災に関する学習、アクティビティスポーツなどの、様々な体験ができます。



浄土ヶ浜（岩手県宮古市）



是川石器時代遺跡（青森県八戸市）



是川石器時代遺跡 木胎漆器出土状況 (青森県八戸市)

2019年に開館した東日本大震災津波伝承館（岩手県陸前高田市）や各地の震災遺構では、地元の方々が「語り部」として震災の記憶を伝えていきます。また、今年7月に世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」のうち、「是川石器時代遺跡」（青森県八戸市）では、定住成熟期後半の多様な施設を伴う集落遺跡として、当時の狩猟や採集などの様子を知ることができます。また、三陸ジオパークを含む総延長千kmを超える「みちのく潮風トレイル」が

開通し、リアス海岸沿いの自然歩道などのトレッキングが体験できます。

三陸ジオパークでは、日々、三陸の大地と海を愛し、守りながら、ともに生きていく地域づくりが行われ、地域の魅力が磨かれています。今後も、三陸地域の活動に注目です。

（三陸ジオパークの活動を詳しく知りたい方は <https://sanriku-geo.com> をご覧ください。）

### ▼北海道にもある5つのジオパーク

北海道にも、洞爺湖有珠山、アポイ岳、白滝、三笠、とかち鹿追の5つのジオパークがあります（2021年12月現在）。それぞれのジオパークでは、火山活動が生んだ雄大な景観や、特殊な土壌が生んだ固有種、寒冷地特有の生態系、黒曜石、石炭による文化の形成など、個性豊かな魅力があります。



# 寄稿 / パージのたより

とある田舎で育った少年は、平成十一年を数年後に控え迷っていた。このまま実家で生活するか？それとも思い切って、実家を出て生活するか？

思春期のよくある話のようだが、平成十一年という年を意識していたのはなぜか？

それは平成十一年を西暦にすると1999年。ノストラダムスの大予言で、空から恐怖の大王が来る年だったからなのだ。

この少年はノストラダムスの大予言を半ば信じ半ば疑っていたが、日を追うごとに不安に駆られていた。万が一予言通りになって、人類が滅亡してしまったらどうしよう？このままここで、一生を終えてしまっているのか？あと数年で滅亡するくらいなら、今とは違う環境で自分を試してみたらどうなんだ？少年は自問自答し、ついに上京を決意した。

両親に対しては、「1999年に人類が滅亡するかもしれないから上京します。」なんて言えるはずもなく、進学というよくあるタイミングで上京した。

都会の荒波に揉まれながら、日々の生活に追われていた少年。気が付

けば大予言の年は慌ただしく過ぎ去っていた。

ちょっとした夢を追いかけて、紆余曲折を繰り返して、少年はサクッと青年になっていった。夢を具体的な目標にして向かっていく中で、出会った同志たち。その中に、青年は自分の夢よりも優先したい人を見つける。

青年の夢は志半ばのまま、優先したい人はかけがえのない人となり、かけがえのない人は二人にとって宝のような存在を生み出してくれた。

主に相手と自分のことだけで精一杯だった青年も父親になった。己の未熟さもあり、中々うまくいかないことがありつつも、家族に助けられ父親として少しずつではあるが、歩みを進めていた。そして、娘の誕生日を明日に控えた、平成二十三年三

月十一日。予約してあったケーキを受け取り、店を出て数時間後の出来事だった…。

過去の大地震には無かったであろう、目に見えない放射能汚染という脅威。あのノストラダムスに言わせたら、これぞ恐怖の大王だ。

どうしたらこの恐怖の大王から大切な命を守るか？それから数か月は、この場所で住み続けられるかどうか試行錯誤をしていた。

しかしながら、二人の宝のような存在の未来に想いを馳せたとき、今住んでいる地域での生活は厳しい。という結論に至った。

そうと決めたら仕事を思い切って辞め、訪れた事のない北海道へ引越した。お金のことを考えたら、自分だけ以前の場所に残って仕事を続

ける、という方法もあったかもしれない。ただその時この父親には、出来るだけ家族の傍に居たい！という気持ちが強かったのだろう。

まあそんな道を選択したもののだから、家の経済状況は芳しくない。一方で気持ちは明るく、自分たちの選んだ道を信じて一路邁進した結果、数多くの素晴らしい人々との出会いに恵まれた。

そんな素敵な人々が光、水、栄養となり、どうにか北海道に根を伸ばしつつあるかつて少年だった父親。新型コロナウイルスという新たな恐怖の大王に屈することなく、引き続き家族を守る男になってくれることを切に願う。

(ペンネーム ももやろう)

## 少年は、家族のヒーローに



家族みんなで、たくましく！頼むぞ～自分！

# ～オンライン座談会のご報告～

## 話してみよう

### 1. オンライン座談会 岡山&北海道 母子避難トーク 「子育て終了と10年後のわたし」

11/13  
(土)

19:30~21:00



母子避難を続ける中で、子どもたちが成長、独立した後のこと、どんなふうに考えていますか？  
岡山県の支援団体「ほっと岡山」の協力で、北海道と岡山県に母子避難しているお母さんたちの座談会をひらきます。「ほっと岡山」代表理事を務めるはっとりいくよさんも、関東からの母子避難です。全国どこでも母子避難のお母さんたちの悩みはきっと同じ…。これから避難元に戻る予定なら、帰った後に母子避難の経験を気軽に話せるともだちづくりができるかもしれません。秋の夜長の土曜の晩に、お茶でも飲みながらゆるゆると話しませんか？  
途中参加、途中退出自由です。

#### 成長する子どもたち

参加されたみなさん、子どもの受験や就職活動など節目を迎える中での参加でした。「子どもは進学や就職でそれぞれひとり暮らし、夫は自宅のある避難元、自分は仕事があるからここにいる。みんなバラバラなんです」との話に、「まさに、これからうちがそうなりそうなんです。夫は夫の親の介護で実家に引っ越すかもしれず…」「うちも来年、子どもが県外に進学する予定なので、そのあと自分はどうしたらいいんだろう、って、まさに今、考えています」

ある方は、「東京にいる子どもは『いつか北海道に帰りたい』と言っています。子どもにとってはここが故郷。夫も来るのを楽しみにしているので、自分がここにいるのも選択肢のひとつ、と思っています」

#### 自分の場所

「この前ふと、もし一人で住むならこんなところもいいな、って思うことがあって。あれ、もしかしてどこに住んでも自由じゃない？って。そうしたら、好きなことできる、って思ったりして…」「避難移住して10年。もっといろんなところに行ったり暮らしたりもしたいな、と思うけれど、それは、今ここに自分が『帰る場所』があるから憧れるのかもしれないです」

母子避難は、放射性物質によるリ

スクを避けるだけではなく、不安の共有がしにくい息苦しさ、暮らしにくさがあいまってという方も少なくありません。子どもも自分も安心して暮らせて、人とのつながりを培ってきた今いる場所を離れるのだとしたら、子どもの自立にとらわれない、自分の人生のタイミングなのかもしれません。

#### コロナ禍で思う

「原発事故後の人々の分断から、さらにコロナ禍で細分化されたような気がします」「放射能に関してもコロナに関しても、余計な心配をして真実を伝えないことでかえって国民の不安を煽ってる。どの情報を自分が信じるか、によって人々の行動や対処がだいぶ変わる、それが怖いと思う」「世の中にはいろんなリスクがある。放射能やコロナのような完璧な対処法がわからない、不確定なことに対しては『まだわからない』』というのを前提で一緒に考えたいのに、ひとつの対処だけを押し付けられているような感じがする。リスクコミュニケーションが取れてないな、っ

11月13日(土)に行ったオンライン座談会、岡山&北海道 母子避難トーク「子育て終了と10年後のわたし」には、岡山県と北海道から4名と「ほっと岡山」代表 はっとりいくよさんが参加しました。

岡山県は、西日本でもっとも避難者数が多く、復興庁によると2021年10月8日現在の避難者数は926名。この日、雑談も交えながらの1時間半は話が尽きず、あっという間に過ぎてしまいました。

座談会から、みなさんと共有したいお話、エピソードなどをお伝えします。

て」「地元の人に『(自分はコロナであたふたしてるけど) 避難・移住してきた人たちは、堂々としているね』と言われました」

#### これまでとこれから

「この10年、その場しのぎでやってきたなあ、と思う。ずっと『今』のことで手一杯で。震災前も、その時々で考えて決めていたけれど、もう少し将来のビジョンがあったし、今ほど『自分はどうすべき?』ということを考えずに暮らせていた気がします」「今までは母親という役割が自分の中で大きかった。子どもが自立すると『自分』というものが残る。これからの10年は母親業の割合が減っていく分、自分のことを多く考えながら生きていく時間になるのかな、と思っています」

#### 「他地域に友達ができると遊びに行ける場所、頼れる場所が増えていいね!」

そんな話もしながら、オンライン座談会「岡山&北海道 母子避難トーク」は、またの開催を約束して、この日は終了となりました。



2014年6月、岡山県で避難移住者の受け入れ支援を行っていた10団体により「うけいれネットワークほっと岡山」が設立され、2年後の2016年6月、当初から活動に参加し、ご自身も避難移住者であるはっとりいくよさんが代表となり、一般社団法人ほっと岡山を設立。相談窓口、交流会、情報紙の発行のほか震災の風化・関心の喪失を防ぐための勉強会「311スタディーズ」の開催や書籍の発行など様々な活動を行なっています。福島県生活支援再建拠点。

一般社団法人 **ほっと岡山**

〒700-0921 岡山県岡山市北区東古松 1-14-24 コーポ錦 1階

事務局：月～金 10:00～17:00

TEL：070-5670-5676 FAX：086-230-4561 ☎：0120-566-311

メール：office.hotokayama@gmail.com



